子どもが中心の学校の学習環境

―きのくに子どもの村小学校の場合―

鈴木陽子

きのくに子どもの村小学校の教育目標

私たちの学園の建物や人的環境は、学園の教育目標を基に考えられています。そこでまず、教育目標とその原則について説明しましょう。

きのくに子どもの村学園は、和歌山県の高野山に近い山の中の小さな変わった学校です。一九九二年に開校し、現在の小学校の子どもは九十六人です。同じ敷地の中に中学校と高等専修学校もあります。

私たちはどの子にも、感情、知性、人間関係のいずれの面でも「自由な子ども」、つまり、次のような子どもに育ってほしいと考えています。

○**感情面の自由**　内心の緊張、不安、自己嫌悪などから解放され、生き生きとして屈託がなく、情緒的に安定している子ども。そして、自己を意識し自己肯定感をもって自発的に生きる子ども。

○**知性の自由**　繊細な感覚と旺盛な好奇心をもち、小さな科学者として考えようとする子ども。具体的には、①いろいろな問題に敏感に気づく　②問題の本質をよく見る　③情報を集めて、仮説を立てる　④結論をまとめる　⑤その結論を実行して、確かめる態度と力をもった子ども。さらに、基礎技術（読

み書き算など）をもち合わせ、情報を収集する方法を身に付けている子ども。

○**社会的な自由**　個人生活の面では、自分自身であることに喜びを感じ、自己主張ができる子ども。社会生活では、ほかの人との触れ合いを喜び、共に生きるための知恵を身に付ける子ども。

基本原則

この「自由な子ども」への成長を援助するために、自己決定、個性化、体験学習の三つが基本原則になっています。

○**自己決定の原則**　大人がすべてを決める教師中心の教育ではなくて、子ども自身の発想、話し合い、実験、評価などを大事にします。そのためには教師は周到に学習材を準備し、環境を整えなければなりません。

○**個性化の原則**　画一主義の授業をやめて学習や活動の多様化を図ります。そのために柔軟なグルーピングや縦割りの学級編成を行って、個別活動、小集団活動、全体活動を組み合わせます。

○**体験学習の原則**　教科の枠をはずして、衣食住や「生きること」に題材を求め、自発的かつ創造的に考える態度と能力の基礎を育て、その結果として、子どもたちが幅広い知識や技術を身に付けていけるようにします。

小学校の校舎と立地について

教育的環境としての建物も、「自由な子ども」という教育目標に合わせて、活動や学習が選択しやすく、多様化されるのにふさわしいようにとオープンプランの建築方式を採用しています。

木造の校舎には廊下がありません。中央には明るい吹き抜けのホールがあり、それを囲むように教室が作られています。教室では黒板に向かって整然と

並ぶのではなく、いくつかのテーブルを囲んで子どもが座ります。床はじゅうたんが敷かれています。教室からは直接外へ出ることができます。

学校は緑豊かな山里にあります。子どもたちが主体的に選んで体験的に学ぶのにも有利です。

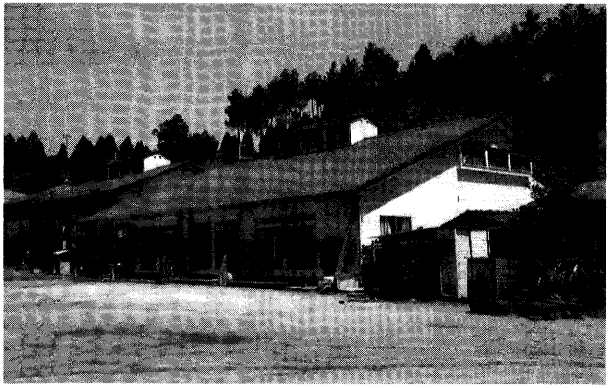
学習形態としての環境

時間割は、プロジェクト、基礎学習、個別学習、自由選択の四つで編成されています。

プロジェクトは自己決定、個性化、体験学習の三つの原則が調和的に実行されるいちばん大事な学習形態です。アメリカの教育学者ジョン・デューイが提唱した「活動的な仕事（active occupations）」の応用です。合科学習、つまり教科の合体や寄せ集めではありません。体験を通して、感情、知性、人間関係の各方面を統合的に伸ばします。小学校では週十四時間あります。

プロジェクトこそは学園の学習活動の中核です。人間の具体的な生活、とりわけ衣食住からテーマをとり、本物の活動に取り組んで、広く、深く学びます。このテーマは大人のコンビが設定し、どこに入るかは子どもが選びます。それぞれのプロジェクト集団（クラス）は必然的に縦割りになります。

今年度（二〇〇八年度）は、四つのプロジェク



▲運動場から見た校舎。手前から小学校、食堂、中学校、高等専修学校。

ト、つまりクラスがあります。木工や建物造りをする「工務店」、農業をする「ファーム」、演劇が中心の「劇団きのくに」、和歌山の食の問題にこだわる「おもしろ料理店」です。

仲間

こういう学校では、仲間も大切な教育環境の一つです。大きな仕事は一人ではできません。みんなで話し合い、目標を共有し、役割を分担し、結果を享受します。プロジェクト活動が中心の学校では、集団の教育力はとても大きいのです。

子どもの七割ほどは月曜から金曜の朝までを寮で過ごします。寮もまた人間関係の術（すべ）を自然に学ぶための大事な教育的環境です。

大人（職員）

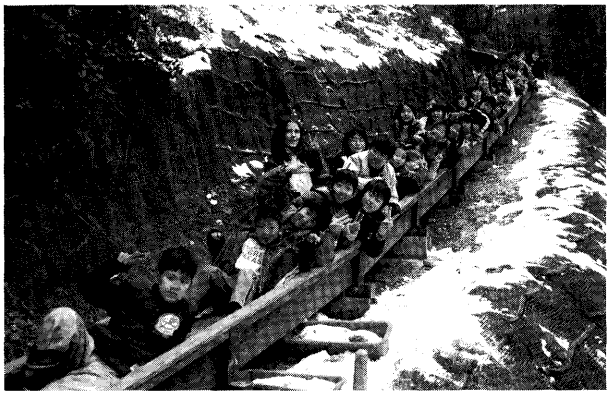
大人は「けいたくん」「ともちゃん」などのニックネームで子どもから呼ばれます。教師と子どもという役割の違いは認め合ったうえで、同じ心理的な高さで対等に話し合える相手です。ミーティングで多数決になれば、おとなも子どもと同じ一票です。たとえ大人の意見でも、子どもが納得しなければ採用されません。わかりやすい話し方や普段の信頼関係が大事です。

おもしろいことに学園長から新人教師まで給料が同じです。子ども一人ひとりはかけがえのない存在です。それと同じように大人も、能力、経験、資格、性別の違いを認め合ったうえで、それぞれが存分に力を発揮しようという趣旨から生まれたシステムなのです。

子どもたちが得るもの

こうした物理的、そして人的環境の中で、子どもたちは何を得ていくのでしょうか。

昨年の二学期に「工務店」では、二十五メートルもの長さのすべり台を作りました。全校集会で広場の崖を滑る子がいて困る、という話が子どもから出ました。話し合いの結果、崖を滑りたい人がたくさんいるのですべり台をつくろう、と決まり、この工事を「工務店」が請け負いました。



▲完成したすべり台をすべる「工務店」の子どもたち。

崖は高さ七メートルで傾斜は四十度くらいでした。何度も長いミーティングをして、斜面に沿って斜めにゆるやかに作るプランがまとまりました。工事は九月末に始まり、完成に近づいたころには十二月半ばになっていました。作っているうちに問題がいろいろ起きてくる難しい作業でした。

学園長の堀真一郎はこの活動で子どもたちが何を感じたかについて、次のように書いています。

「子どもたちは、大変な苦労にもかかわらず、このすべり台づくりを楽しみ、おおいに満足した。（中略）プロジェクトは、私たちの学園の学習活動の中核で、創造的に考える態度と能力、そして多方面の学習をねらいとしている。子どもたちは、大きな事業を完成させた喜びと同時に、自分が何か新しいことを知り、今までになかった力が身についたと感じる。この実感こそ、子どもたちが学校で感じるいちばん深い楽しさといえるだろう。」[注]

子どもと学習環境

子どもの学ぶ環境を考えるとき、当たり前なのに忘れられがちなのは、子どもの存在です。

日本では文部省の助成を受けて、オープンプラン方式の校舎がかなり誕生しました。しかしそれは建築家主導で行われ、現場の多くの先生たちは、建築家から聞いて初めてこの建築方式について知ったそうです。その結果、建物は新しいのに中身は旧態然とした教育という事態が起こってきました。

オープンプランは、一九六〇年代のイギリスで、子どもの経験や活動性を重視するインフォーマル・エデュケーションを効果的に実行するために考案された廊下のない校舎です。子どもの楽しくて自発的な学習を促すために建物を変える、という明確な理念が先にあったのです。

逆にいえば、建物がオープンプランでなくても、インフォーマル・エデュケーションを試みることはできます。つまりその精神を生かした人的な環境は、工夫次第でかなりのことができるはずです。大切なのはどのような子どもに育ってほしいかという教育理念です。

学校の環境を考えるときには、子どもたちの豊かな成長を中心に発想することがいちばん大切なポイントだと思います。

（きのくに子どもの村学園　教諭）

参考文献

堀真一郎『自由学校の設計―きのくに子どもの村の生活と学習』黎明書房（一九九七年）

註

堀真一郎「子どもが成長を実感できる学校　きのくに子どもの村小学校の長いすべり台づくり」『教育と医学』慶應大学出版会　二〇〇八年四月号　二百四十二頁―二百四十三頁